

何故だか、今頃になるとさだまさしの曲を思い出す。『蝉時雨』とか『精霊流し』とか……。そういえば藤沢周平の小説にも『蝉時雨』というのがありました。底流に男女の愛情というものが丁寧に、細やかに表わされていて、読後感はいわゆる爽やか。暑い最中、お奨めの書です。

しょうろう

### 精霊流し

さだまさしの従兄弟が恋人と二人で海に遊びに行きボートに乗っていた時、オールが流されてしまう。彼は海に飛び込んで取りに行ったきり戻っては来なかった。川に灯籠とうろうを流して死者の霊を送るといふ精霊流しで彼の霊を送る彼女の心境を歌った曲です。

## 【五山送り火（大文字焼き）】

昨年の大晦日、21世紀の幕開けということで例外的に挙行されましたが、通常は8月16日と決まっております。とは言え、過去に何回かは例外的に点火されたことがあります。

明治23年4月8日 疎水通水祝賀のため点火。

明治24年5月9日 ロシア皇太子（後のニコライ2世）入洛祝賀のため点火。

この皇太子は、11日に大津に入った時、巡查・津田三蔵に切りつけられ負傷しております。（大津事件） また、26年後のロシア革命にて銃殺刑とされた悲運のラスト・エンペラー（ロマノフ王朝）でもあります。

明治27年05月15日 明治天皇の京都御訪問に合わせ、日清戦争勝利祝賀のため点火。

明治38年11月25日 東郷提督の上洛に合わせ、日露戦争日本海海戦勝利祝賀のため点火。

昭和09年09月？日 室戸台風による樹木倒壊被害甚大につき、木の霊を弔うため点火。

この翌年に鴨川大洪水が起きて、年に二度も行うのはよくないとの声が続出したという、いわくつきの点火でした。

上記を見てますと、明治という時代は日本が元気過ぎるくらいの状況だったようですね。

一方で、中止になった時期は、やはり第二次世界大戦の折り、昭和17～20年の4年間でした。昭和16年も点火はしていませんが、何と人文字で表わしたそうです。小学生や市民2,000名が白いシャツを着て、火床の位置に並び、ラジオ体操を行い、日中に白い大文字を描いたのです。

この送り火ですが、いつ頃どのように始まったとか、詳しいことは不明で謎だらけという代物です。送り火についての最も古い記録は公家の船橋秀賢の日記『慶長日件録』でして、慶長8年、即ち徳川家康が将軍になり、江戸幕府が成立した1603年の7月16日に、次のように出てきます。

「晩に及び冷泉亭に行く、山々に灯を焼く、見物に東河原に出でおわんぬ」

鴨川に出て眺めたものが、おそらく送り火（大文字焼き）であったと思われます。当時は旧暦7月ですが、今日では月遅れのお盆で8月に点火するようになりました。誰が始めたのかについては諸説あり、弘法大師（空海）、足利義政、近衛信尹（公家）、横川和尚（相国寺）らの名前が並びます。しかし貴種高名の方が始めたのなら、必ず公的文書を残すはずでしょうから、結局のところ、こういう方は行事に影響を及ぼした立場にあったかもしれないが、実際にやり始めたのは一般庶民であろうと思われます。ただ、これだけ大掛かりに、また永年にわたり連続と継続されるためには、求心力ある存在があったと思います。先述した人物はその候補者であります。

ときに、京都の送り火は5か所であることはご存知かと思いますが、大文字山に登りますと、他の四山は視界の内に収まります。しかし、大文字山以外の四山は自分の山に登って、他の山を全部見ることはできません。必ずどこかの山が隠れてしまうのです。従って、送り火の中では、大文字山こそが全体の中心的存在であろうと想像が付きまします。

さて、この大文字山ですが、火床の面が真西、即ち市街地の方に正対しておりません。火床面は北西を向いております。ちょうど出町（鴨川と高野川の合流地点）あたりが正面になります。この出町付近でいえば、少し西へ進むと、足利家と関係の深い相国寺、さらに花の御所と呼ばれた室町幕府跡の界限となります。有力な説としては、こちらの方向に向けてあるのではないかとされています。大文字保存会の会員は旧浄土寺村の人々ですが、地元の話ですと、足利義政が

早く没した9代将軍(義尚)の霊を慰めるために、相国寺の横川和尚に頼んだ、とされています。実際に造作の労を取ったのは民衆であるが、その背景に足利家があるというわけですね。慈照寺を通じての結びつきで、足利将軍と地元民は今も、感情的に一本の線で結ばれているようです。慈照寺(俗称は銀閣寺)というのは、元の浄土寺が焼失した跡地に足利義政が建てたものです。ですから、元々の土着住民や浄土寺のゆかりの人、さらには足利家の家来筋と、浄土寺村を構成する人々が結びつくのも不思議ではありません。銀閣寺はさすがに歴史を持っていますね。

送り火についてはもう一つ、廃絶したものもあります。現在は大文字、左大文字、妙法、船形、そして鳥居形の5種ですが、昔(江戸後期~明治)には「いの字」、「一の字」、さらには「竿に鈴」または「竹に鈴」といった送り火が存在したようです。何故消滅したのか、これもまた謎です。

送り火は京都だけに限らず、日本の各地に多数存在しています。京都近辺でいえば、奈良市の高円山(15日)が有名です。この場合は県内の戦没者3万人の慰霊のため、昭和35年に開始されています。東大寺と春日大社の万灯籠も同時に挙行されているので、ライトアップされた中で、光と火の世界は大変美しいものです。

話は逸れるかもしれませんが、先ごろ明石市の花火大会で不幸な事故が起きてしまいました。お亡くなりになった10名の方の大半が幼い命でした。痛ましい限りです。ご冥福をお祈りします。

#### 【大文字ゆかりの文芸】

与謝蕪村・・・大文字やあふみの空もただならぬ

大文字に火が入り、その焰と光が夜空に映える。山の逆側の近江の国の人々も西の山々を見ては、空が明るい、あ、今晚は京都の大文字だと、ただならぬ空の下で思っているのではないか。そんな感慨を詠んだものです。

吉井勇・・・京に老ゆ<sup>わぎもこ</sup>吾妹子もまた老いにけむ このごろしきりに肩凝るといふ

京に老ゆ大文字の送り火を ながめしことも二十幾たび

東京生まれですが、後年祇園界隈で情愛の炎に身を焼き、遊蕩にエネルギーを費やしました。生涯の最後の日を迎えんとする時期、胸内を何が去来したか。

水上勉・・・『片しぐれの記』の「盆の章」 } 男女の愛欲と いつかは消える大文字の炎  
『沙羅の門』 } 水上は陰影を帯び 瀬戸内は絢爛と

瀬戸内寂聴・・・『京まんだら』 } 情念の世界を描く

沢野久雄・・・短編小説『夜の河』 山本富士子主演の同名の大映映画の原作

徳富健次郎・・・『黒い眼と茶色の目』五章「山下家」 蘆花が同志社を去った恋愛実話がモデル  
(徳富蘆花) 新島襄も飯島校長名で登場

長田幹彦・・・『祇園夜話』の「送り火」 「竹に鈴」が会話の中で出てきます

この人は「月はおぼろに東山～」で始まる祇園小唄の作詞で知られた作家です。

#### 【お店の紹介】BAR「K6」 中京区木屋町二条東入ル ヴァルスビル2F PM6:00~

鴨川沿いにフジタ・ホテルが有り、その西隣あたりです。暮れなずむ頃、東山や鴨川を眺めると、ちょいといい気分です。カクテルやウキスキーも似合いますが、ギネスビールとつまみの「フィッシュ&チップス」もお奨め。繁華街の喧騒からは趣を変え、アダルトな店です。

今回は大文字送り火をテーマにしましたが、信仰と申しますか、先祖の霊を迎え送るという習わしは、関わっているうちに、自ずと「死」というものに向かい合っているんですね。「死んだおじいちゃんやおばあちゃんが家に戻ってきて、しばらくしたらまた帰っていかはる」とか、「道が暗いとあかんから火をつけるんえ」など、親から聞いたような記憶があります。

子供にとっても、この日だけは特別でして、屋根の上に登っても叱られることはありませんでした。よく見れば隣近所も同様で、屋根の上で会話を楽しんでいたように思います。「あ、火がついた」とか、「もうじき火が消えそうや」とか、会話とはいえないようなものでしたが、今ではマンションとか高いビルが多くなりましたので、こうした風情は無くなりましたね。

暦の上では秋になりますが、行く夏を、心静かに味わうのもよろしいのではないのでしょうか。